

# Q & A でまとめる！

## 予後予測・治療効果予測の画像検査

### 序文

画像診断医は本能的に正確な診断を行うことに傾注し、診断に迷ったときに、ありふれた疾患からまず考えられないものまで、多くの鑑別診断を苦勞してレポートに羅列する場合が見受けられる。一方で、たとえ原因疾患や病理といった面からの正確な診断がつかなかったとしても、適切な治療を行うことができれば患者さんにとってはハッピーである（QOL が上昇する）。近年、新しい診断技術の保険適用を決定する際に、正確な診断をするために極めて有用な技術であっても、その診断を基に選択される治療方法が開発されていない、あるいは治療によって予後の改善や QOL の上昇がもたらされることが証明されていないといった場合には収載されない傾向がある。

この適切な治療方針の選択は精度の高い予後評価が可能となってはじめて達成される。そして、画像から予後を推定する試みもこれまでに数多行われてきた。病変の形状やサイズ、周囲臓器への浸潤性、全身における病変の分布、さらには機能画像である核医学検査では集積亢進や集積低下の程度から得られる病変のアグレッシブネス（aggressiveness）、重症度といった多数ある画像に含まれる情報の中から、予後予測因子を選び出す方法や、その情報が予後においてどのような意味をもつのかを画像診断医は理解しておく必要がある。さらに、予後を推定するために用いられるマーカーには画像以外にも様々なものがあり、複数の情報を組み合わせて判断することもしばしば行われる。このあたりは昨今注目されている AI が今後重要な役割を果たすと予想されるが、現時点では人間が判断しなければならない。

そこで本増刊号では、予後を推定するためには画像からどのような所見を抽出・選択し、どのような基準で判断すればよいのか、どのように情報を組み合わせればよいのかといったことについて、各領域で近年行われた研究の成果から、その分野に精通している専門の方々に執筆をお願いした。予後の推定方法には領域特異的、あるいは疾患特異的な面もあり、分野が異なると応用しにくいといったこともあるが、各領域に共通した基本的な考え方や様式も存在すると考えられる。分野横断的に広く網羅することで、読者の日常臨床のヒントになることを期待する。

2020 年 8 月

『臨床放射線』編集委員会